

# 絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

「！」思わず体が凍ってしまった。

今日は午後、とある大企業の社員食堂に掛けてある大きな油絵作品の状態調査業務に行っていたのです。表面は綺麗で問題なく見えていた作品だったけれど、裏面の裏蓋を開けて、絵を額から取り外した途端、それはそれは大量の、何か松の実みたいな大きさの虫の脱皮した殻と、黒い粉状の糞が額の側面や作品の裏面にびっしりと付着していて、それがアクリルガラスの表面にまでパラパラとこぼれ落ちてきた。

私の作業は会社関係者の人々が、立ち会って見守っていた。私だつてもうかれこれ20年この仕事をやっているの、虫のカケラの一匹や二匹等なんてことはないと思つてきた。それに、キャンバス裏

の数十年分の堆積した埃なんて毎回のこと、平気で刷毛で掃除をする日常だ。でも……。これはだめ。20年やっていて本当にはじめてのとつてもシニールで、堪え難い、その虫の殻の形状及びテクスチャー。とにかく、今日の私は、絵を持ち上げたまま呆然としてしまった。

その道のプロ、と言う言葉ほどの職種の方もそうでしょうけど、私も強く意識を持つて生きてきたように思います。いつか、美術館の学芸員の人に「エーツ加賀さん、B型なんですかー。良く修復家になれましたねえ。」なんて言われたけど、B型はとつても修復に向いていると内心思つたものです。

B型は、人一倍バカをやつて悪乗りしちゃうけど、常に冷静に何処までバカをやつていいののぎりぎりの線の見極めをしている。つまり、常時あんまり気を抜いていないのです。修復をやるには、えいっと未知の絵の表面を落とす、と言う作業に飛び込んでいく思い切りのよさも無いとやつてゆけない。そう考えると、好奇心が強くて、自意識が強く、冷静かつ、のめり込んで仕事をしやすいB型は、結構修復に適正があると思えるのです。

プロ根性、という事で私がいつも自分に課しているのは冷静にとことん考えて手順を踏むという事です。これをやらないと、失敗をする。だから、初めての絵が来たなら、まずは誰もアトリエに入らず、必ず一人で絵を前にしてぶつぶつ言いながら処置手順を頭の中で組み立ててゆく。最近はその手順の一過程をやつてもうか

誰にその手順の過程をやつてもうかかも考える。その人の手のクセや、仕事のキャパシティも考える。想定できる範囲の失敗に因してもシニールにする。もしもフォローできなければ、この仕事は一巻の終わりだからだ。

以前、ループルで2つの大きな失敗事に遭遇した事がある。一つは、大きなペロネーゼの「カナの婚礼」の作品修復を、ガラス張りの狭い空間の中で修復家が見世物になつて修復作業を展開するといふあいだで、アクシデントが起こつた。衆人環視の中、誤つて誰かが脚立を倒したか何かで絵を傷つけてしまったのだ。これを聞いた時は、「あーア、やつぱりやつたか、しかしプロじゃないなあ。」と思つた。だって、そもそもあんな狭い空間で複数の人間が動いていて何も起きないと信じる方がどうかしている。わざわざ見世物状態になんかしないで落ち着いた仕事環境にするべきなのだ。もしもいつか、モノリザを修復する事があつた

としたら、あんな体制はとらないだろう。でも、ペロネーゼだつてとつても立派な巨匠だ。あんな企画を考えた人こそ修復を知らない素人だ。(たぶん、絵を触つた事の無い学芸員の発案だろう。)

2つ目は、もつとすこかつた。或る日ループルの引越しの事を特集組んでいる番組を見ていたら、生放送でクレール車を動かしてエジプト美術の彫刻の移動をやつていられる映像があつて、ベルトを掛けて吊上げた灰色の大理石に刻まれた大きなスフィンクスが、高く上げられた瞬間、ツルツとすべつて地面に落下した。5000年生き延びた美しい彫刻は哀れ真つ二つ!

時々ループルに行くと、廊下の隅に、そのセメントで修復されたスフィンクスと出遭う。「オマエひどいことされたねえ」と思わずそのざらざらのセメント部分を撫でてしまう。

これも、何かせかせかと急いで状況判断が鈍つた為起きた事件なのだろう。

〈確信をもつのは、長く鍛錬をしてからだ〉、と私はいつもボスにどやされてきた。大壁画の洗浄をしていて薬品の効き目が悪く、なかなか汚れが落ちず、ボスの留守中、そうつと薬品を加えて作業をすめた事がある。にらんだ通り、汚れはいい調子で取れ、作品にも何の影響も無かつた。仕事は計画より早くはかどつた。ボスが帰つてきて、私の仕事ぶりを見渡し、ふふん、と言つた。そして私の両腕を掴んで怖い顔でにらんだ。おまえ、薬品足したな?! 長い付き合いで、彼が、彼が示した量より、私の決めた薬品の量の方が的確に作用させるには判断は正しかつたと思つているのはわかつた。でも、一足飛びに数滴ずつの試験をしないでペーパーの私が薬品を扱つたのをきつづく吐つたのだ。

その後数年、彼は厳しく私に我慢することを教えた。数滴、また数滴……。彼のお蔭で、どういう状況の絵に、どの薬品をどれくらい使つたらいいか、は、手にとるように感じる事が出来るようになっていつた。だから、今はピーカーに目分量で薬品を混ぜていつても全く失敗しない。

日本に帰つた時、一時よその修復工房である期間働いたが、私が混ぜる薬品のやり方を見て誰かが荒つぽいと言つていた。皆、スポイトで薬品の量を量つてい

た。しかし、私が咄嗟に見て、彼らのその量は絵に対して的確ではなかつた。彼らはまだ修復経験が短かつたのだ。

今、私の工房でも、働いている人は私の言う「この量に対してこの薬品を2滴ね。」と言う事を守つてくれている。今はその方がいい。いつか、その人が自分自身で的確に量を定めてきつと処置をしていつてくれるのを待つている。そうすると、すつとく楽だもんね。気を張らなくていいもん。全部任せて遊びにいけるし……。早くそうならなかな。そうしたら映画見に行つちゃうワン。(おいおい)

ところで、冒頭の虫の正体つて、あれねえ、ゴキブリだと思ふの。糞の形状から言つて。

ゴキブリつて、油絵が大好きなんです。皆さんも気をつけてください。夜な夜な絵の表面を舐めて住んでいるんですヨ。まあ、別に他の虫に比べて穴を空けたりなんてしないんですけど、排泄物が酸化して絵に斑点状の変色を起こしてしまふし。とにかく、不気味なのはあそこが社員食堂だつて言う事かなあ。私、黙つていないと、あの絵を見ながら食事なんて皆出来なくなつちやいますよネ!!

(つづく)